平成19年度全国学力テスト結果から

文部科学省は本年度から、日本の児童生徒の学力向上をめざして、全国の小学校六年生および中学三年生の全ての児童生徒を対象に、全国一斉の学力テストおよび生活学習状況の調査を四月二十四日に実施しました。

科目は、小学校は国語Aと国語B、算数Aと算数B、中学校は国語Aと国語B、数学Aと数学Bです。Aとは主に知識問題で、Bは知識を活用する応用問題です。

当初の予定では、夏休みに入る七月頃までに結果を出すとのことでしたが、採点と集計業務が大幅に遅れて、実施してからちょうど半年後の十月二十四日に、それぞれの市町村教育委員会および各学校へテストの結果が通知されました。

甘楽町の児童生徒の結果状況は、町の校長会に分析をお願いしました。その概略について町民の皆さんにお知らせします。

小学校は全国平均
中学校は全国平均上まわる

文中の写真と記事は関係がありません

■ 甘楽町教育委員会
教育課学校教育係　内線510、511

小学校

各教科の状況

記述して説明する力に課題

国語A(知識)では、正答率は全国平均と同じ傾向で8割強でしたが、漢字書き取りの定着の良いものと、良くないものとの二つの傾向が見られました。

国語B(活用)の正答率は6割程度で、国語Aと同様に全国平均と同じ傾向でしたが、正しく読み取って短く要約したり、説明したりする力に課題が見られました。

算数A(知識)では、正答率は全国とほぼ同じ傾向で8割強でしたが、正数÷小数の計算など、小数の乗法の意味が理解されていない傾向が見られました。

算数B(活用)の正答率は6割強で、算数Aと同じく全国とほぼ同じ傾向でした。

ただし、筋道を立てて考える力、他と比較して説明する力に課題が見られました。

全般について

知識の活用に課題

国語、算数ともに「知識」を問うAの問題は8割の正答率で、到達目標値に達していると考えていますが、応用力を問うBの活用問題はそれぞれ6割台であり、A問題より約20％程度開きが見られ、「生きる力」をはぐくむ上でも、今後の指導の重点として改善を図りたいと考えています。

中学校

各教科の状況

全国平均より5ポイント上回る

国語A(知識)では、正答率は8割で、全国平均を上まわり、すべての領域で全国平均より5ポイント以上高く、特に書く能力については高い得点を示しました。

国語B(活用)の正答率は約8割で、全国を大幅に上回りました。特に「読む」「書く」ことや、国語への「関心、意欲、態度」、「言語事項」の問題では高い数値を示しました。

数学A(知識)では、正答率は7割強で、全国並みでした。小学校の算数問題にも四則計算の混乱が見られたのと同様、基本的な正負の四則混合計算などに課題が見られました。

数学B(活用)の正答率は6.5割で、全国を5ポイント上回り、応用する能力では高い数値を示しました。特に「数量関係」や「数学的な見方考え方を問う」問題では全国を大きく上回りました。

全般について

知識の活用好成績

国語、数学ともに、「知識」を問うAの問題は8割の正答率で、到達目標値に達していると評価できます。応用力を問うBの活用問題は、国語では正答率が8割で全国平均を大きく上回り、目標値に達していると評価しています。数学では正答率が6.5割で、全国を5ポイント程度上回っていますが、今後さらに応用力をつける工夫が必要です。

生活学習

「朝食、毎日」「学校へ持っていくもの、事前に確認」
…… 小中ともに各教科で高い正答率

今回の調査の特徴は、学力を見るための国語や算数(数学)のテストだけでなく、児童生徒の基本的な生活習慣、生活環境、学習環境、学習意欲などの質問(アンケート形式)が行われ、興味深い結果が見られました。

基本的な質問については、回答と各教科の正答率の両方に着目して分析されており、生活指導、学習指導に参考になると思われます。

特徴的な項目について参考に一例をあげます。

学校に持って行くものを前日か、その日の朝　確かめていますか

質　　問	小学校	中学校
している	67.2	71.1
どちらかといえばしている	23.9	18.1
あまりしてない	9.0	6.0
してない	0	4.8

概ね学習意欲は良好と見られます。

「している」と回答した子どもは、その他の子どもにくらべ全般的に正答率が高く、特に小学校では、算数ABともに10から15ポイント高くなりました。

朝食を毎日食べていますか

質　　問	小学校	中学校
食べている	82.1	86.7
どちらかと言えば食べている	11.2	6.6
あまり食べてない	6.0	4.8
食べてない	0.8	1.8

小中学校ともに8割以上が朝食をとっています。毎日食べている子どもは、他の子どもより全科目とも5ポイントから10ポイント高く、特に小学校では算数、中学校では数学に著しい傾向が見られました。

生活調査では、一般的に大人が好ましいと思える回答をした児童生徒は、全般にわたってどの教科とも正答率が高く、**家庭での生活習慣や生活環境、学習環境、学習意欲が学習成績に大きく影響**していることを裏付けています。

教育委員会や学校としては、この結果を踏まえ、家庭と連携しながら、よりよい学習環境を整え、学校においては指導の工夫、改善を図り、児童生徒の学力向上に努めていきたいと考えています。